

「地元」労働市場における若者たちの「大人への移行」

— 社会化過程としての離転職経験 —

尾川 満 宏

(2012年10月2日受理)

The Young People's 'Transition to the Adult' in the Local Labor Market
— The experiences of job-change as the socialization process —

Mitsuhiro Ogawa

Abstract: The aim of this paper is to reveal how young people experience the local labor market in their local social networks or communities on the transition process to the local 'Adult.' In Japan, the difficulties among the young people in their occupational lives have been the serious social issue over the transition, and many studies have described their social position and condition. Especially, the relation between young people's <labor-life> world and their social networks has focused on as the realities of their lives. However, the earlier studies have missed the impacts of the locality on the experiences of young people, so this paper tries to interpret how young people make the social relationships with local labor market, the local social networks or communities through a sociological fieldwork in a rural area. According to the young people who have raised and worked there, the information, shared experiences or discourses flowing the local communities and peer groups were the important materials to organize the reality of the local labor market. By reference to this reality, they could narrate the Model Story of the locality, and reposition their own experiences in this story and their self-identity on the process to the local adult. Finally, it is indicated that analyses of the negotiation between young people's experiences and the representations of the locality offer some penetrating insights for the studies of youth transition.

Key words: rural area, young people, labor market, social network and community, locality
キーワード：地方、若者、労働市場、社会的ネットワークとコミュニティ、地域性

1. 問題の所在

本稿の目的は、ある地方の郡部地域における若者たちの職業経験と「地元つながり」との結節点を記述＝解釈することで、仕事を中心とした「地元」における

本論文は、課程博士候補論文を構成する論文の一部として、以下の審査委員により審査を受けた。

審査委員：山田浩之（主任指導教員）、山崎博敏、
河野和清、林 孝

「大人への移行」のリアリティに迫ることにある。

1990年代以降、学校を離れ職業の世界へと参入する際に困難を有する若者たちが問題化されてきた。すなわち、学校卒業後の進路を決定できない／しない学卒無業者、正規労働市場から排除されキャリア形成に困難を抱えるフリーター、様々な事由により「正社員」からの離脱を余儀なくされた若者などである。そうした若者像の提示は、学卒無業者の析出構造、正規／非正規の格差と双方の労働問題、それらの若者たちの生のリアリティという、大別して3つの問題構制を定式

化した。そして、移行過程における若者たちの社会的
位置や経験を把握・記述し、教育をはじめとする若者
支援や労働政策に示唆を与えてきた。

移行過程に困難を抱える若者たちのリアリティとし
て着目されてきた側面のひとつは、彼らの〈労働一生活〉
世界と、それを取り巻く社会的ネットワークやコミュ
ニティとの関連である。この背景には、ギデンズ
やベックなど後期近代の理論が提起する「個人化」が、
若者の移行においても深刻視されてきたことがあげら
れる（乾 2010）。伝統的コミュニティや標準的ライフ
コースが崩壊し「自己責任」イデオロギーが前面化
するなかで、若者たちはいかに移行過程を乗り切ろう
としているのか。その具体的な側面のひとつとして、
若者のキャリア形成や生活上の諸課題を顕在化／潜在
化させる社会的ネットワークやコミュニティ、すなわ
ち種々の「つながり」¹⁾の機能が分析されてきた（新
谷 2007；沖田 2004；竹石 2006；堀 2006など）。

これらの研究で「フリーターの特徴とされているこ
とは、質的にも量的にもそのネットワークのありよう
が限定されたものになっている」ことである（内田
2007, p.140）。たしかに、就労をめぐる不安定な境遇
を共有する仲間とのつながりが、自前で「なんとかやっ
ていく世界」を築く際の資源となり（戸室 2009）、
また精神的な居場所としても機能する場合がある（乾
2010）。しかし、正規／非正規に分断された労働市場
において、同質の仲間コミュニティに依存した仕事探
しは一時的な就労を可能にしてもそこからの離脱を困
難にしてしまうというケースが多く報告されている。

このように、フリーターや不安定就労者が形成する
「つながり」は、「就職斡旋」や「居場所」の機能の有
無／強弱といった枠組みで、時にその二面性やジレン
マが論じられてきた。その結果、新しい若者支援の方
途や、マクロな社会変容と若者たちのアイデンティ
ティとの関係を論じる地平が形成された点は重要であ
る。ところが、従来の議論は若者たちの労働経験と「つ
ながり」とを個別に実体化し機能主義的に結びつける
ことによって、その結びつきが特定の様式やフレーム
のもとで経験される局面を背景に追いやってきた。つ
まり、若者たちに生きられた「つながり」を読み解く
ことによって可視化される〈労働一生活〉世界のリア
リティを矮小化してきたのである。

この問題の原因のひとつは、若者の経験に関する従
来のほとんどの記述が「東京」という「グローバル・
シティ」（Sassen 訳書 2008）の物語であることに無
自覚だったことである。これは、地域移動が相対的に
少ない高卒就職者を扱う場合に特に深刻だと思われ
る。なぜなら、特定地域で比較的長期に生活するかれ

らの経験や生活様式は、否応なく地域的な環境や条件
に規定されるからである。この観点からいえば、従来
の若者の生に関する記述は「東京」というグローバル・
シティの構造が生きられたときの物語であり、ひるが
えってそれ以外の地方や地域が生きられるときの物語
はほとんど編まれてこなかったといえよう。

1990年代に入り、本格的に若者文化研究に着手した
人文地理学の議論によれば、社会への移行過程におけ
る若者のアイデンティティは今日においてなお地域や
場所といった空間的 spatial な要素と未分化である²⁾。
とりわけ、地理学におけるエスノグラフィックな若者
文化研究によれば、「『場所』が若者アイデンティティ
を形成するだけではなく、若者アイデンティティもま
た場所の特質を形成し、影響を及ぼす」（Nayak 2003,
p.28）という。このような、若者アイデンティティと
地域 locality や場所 place との相互構成的な側面に着
目することは、若者たちの〈労働一生活〉世界をかれ
らのリアリティから主題化し、「大人への移行」過程
とその意味が社会的に構成される側面を描く場合にも
有効である。なぜなら、若者が経験する社会関係と社
会過程のリアリティに対して、これまで等閑視されて
きた地域という構造的な問題を文化的なレベルで扱う
ことを可能にするからである³⁾。

このように若者の経験と空間的要素の関係に注目す
ることで、若者の「大人への移行」はもはや単に職業
移行やネットワーク形成の問題へと収斂されなくなる。
むしろ、それら諸過程を通じた地域的な「大人」
アイデンティティの達成、すなわち社会化の問題とし
て立ち現れる。ここで求められるのは、若者たちが地
域社会と関係を形成してゆく過程と意味を、ローカル
な労働世界や「つながり」をめぐるかれらの生活世界
から記述してゆく試みである。つまり、先行研究のよ
うに「つながり」を実体化し、キャリアや生活に対す
るその機能を論じることよりも、若者たちが「つなが
り」を生きる過程と、その経験をめぐるローカルな解
釈フレームに迫ることが重要になる。こうして、若者
たちが自身の生活圏で「大人への移行」をいかに経験
し解釈しているかという問いが前面化してくるのであ
る。

そこで本稿は、若者たちの職業世界での経験と「つ
ながり」との結びつきを読み解くことで、仕事を中心
とした「地元」における「大人への移行」のリアリティ
を明らかにする。具体的には、ある地方の郡部地域を
調査フィールドとして、そこに生まれ育ち働いてきた
若者たちのキャリアと「つながり」に関する経験を記
述＝解釈することにより、彼らがどのように「地元」
労働市場との関係を形成したのかを検討する。これま

で等閑視されてきた地方の若者たちの経験を扱うことで上述の視座のインパクトを探りつつ、以上の作業を通じて移行研究の新たな局面を示唆したい。

2. 調査の概要

筆者は2008年夏から、ある地方の若者グループに対して、彼らのキャリアと生活に関するフィールドワークを行ってきた。調査地域（中国地方 X 県 Y 市）は、県庁所在地から離れた過疎化の進行が顕著な郡部地域である。若年労働力が流出しやすく求人の量も豊富とはいいたいものの、高卒無業率はさほど高くない。

本稿の調査協力者4名は、彼らの「地元」の中学や高校の同級生である。2000年代前半に県立 A 高校（県内偏差値40前後、非普通科校）卒業した後は、全員「地元」で就職し、遊びなどを通して断続的に交流を続けながら、いわゆる「地元つながり」を形成・維持している。加えて、後に詳しく見るように、彼らは仲間集団にとどまらない血縁や地縁といった種々の「つながり」のなかで職業経験を蓄積してきた。

筆者がグループへ参与するようになったのは、調査協力者たちが高校を卒業し就職した頃からである。筆者は知人を介してグループの集まりや遊びに参加しながら、彼らとの関係を形成・維持してきた。その間、筆者は自然発生的かつ無意識的に彼らの労働・生活経験に関する語りにアクセスしてきた。こうした経験から、「地元」での経験が彼らの移行過程にどのような影響を及ぼし、ライフコースをどのように意味づけるかという点に筆者の問題関心が焦点化され、彼らに調査協力を依頼し承諾を得た（2008/08/13フィールドノート）。その後、定期的にグループの集まりに参加して観察を行いながら中心メンバーの何名かに個別の、あるいは集合的なインタビューを重ねてきた。

以上の調査にもとづき、次節以降は調査協力者たちによる語りから、彼らの離転職経験と「地元つながり」の結びつきを記述＝解釈する。そのうえで、労働移動と「つながり」を基盤として生きられる彼らの「地元」リアリティ、さらに「地元」で「大人になる」過程の

一側面を描出することで、本稿の主題に迫りたい。

3. 離職・再就職の経験

高校時代、「ヤンキーしとったわけじゃないけど」（ショウジ2009/01/22）、そうした集団とも交流があったという調査協力者たちは、いわゆる「まじめ」な生徒ではなかったようである。高校に「入ってすぐ就職のことなんか考えるかフツー!」（カッチャン2009/05/02）という感覚をストレートに表現する彼らのキャリア選択は、高校での学習経験や進路指導に水路づけられることなく、独自の感覚と生活展望のもと行われた。たとえばカッチャン（2009/01/23）は、「そりゃあ一番の興味はクルマ」という理由で就職できそうな企業をよく吟味せず「早く」「簡単に」決めて、自動車学校に通い始めた。都市部で就職すれば「クルマもいらんようになって。せっかく免許取ったのにクルマにも乗れんなんかつまらんし」、「先輩とかでも県外出た人でもう、生活、苦しいっての分かっとった」ため、地元就職しか考えていなかった。彼らにとって仕事は「当たり前みたい。もう、学校行くと同じ、行かないけん」（ショウジ2009/01/22）義務として認識されていただけである。重要なのは、生まれ育った「地元」ですぐに就職し生活を営んでゆくことだった。

以下、高校卒業後の彼らの職業経歴を概観していく。

（1）カッチャン

高校卒業後、カッチャンは実家から近い飼料会社に就職した。本来「営業」職で就職したにもかかわらず、工場内の作業に従事させられていた。そうした実態を隠べいし、本社の「嘘の報告ばかり」上げるのに躍起だった会社に対し、彼は大きな不満を持つようになったという。当時を振り返った彼は、会社の「おかしかった」点を延々と語りだした。残業手当や休日出勤手当が出ないことにも「無理、やっとなれん」「先がない」と思い、彼は約1年余りでこの会社を辞めた。

K：俺、一応営業で入ったんだけど、全然違うことしとったし、（中略）「営業に毎日出てます」っていう

表1. 調査協力者のプロフィール（五十音順）

	カッチャン	ショウジ	ヤマタク	ヨシ
性別	男性	男性	男性	男性
高校時代専攻	測量	情報処理	測量	商業
初職入職経路	学校経由	知人の紹介	親の紹介	学校経由
高卒後10年間の職業経験	飼料製造 建設作業 工場労働（非） 工場労働	建設作業 建設作業 工場労働	建設作業 タイヤ販売（非） 工場労働	食品製造 板金作業（非） （大阪へ転出）

注：表中の（非）は非正規雇用であったことを表す。

報告が出ると、本社としては俺がちゃんと営業に出るとかと思ってるんだけど、実際問題俺なんか、営業なんてやってないし。(中略)口裏あわせるための、色々ね、嘘? 「今日はこことここ行きました」みたいなね。そんなん言われたりとか。そんなん俺だって、意味わからんのだろ?

(2009/01/23)

カッチャンは離職後「1カ月ぐらいブー(無業)して」、当時ショウジが働く建設会社に入社した。「ショウジが働いとったけ」「求人票出とれば、ぐらい」の気持ちで地元の公共職業安定所(以下、職安と略記)に行き、ちょうどその工場から求人が出ていたので応募したのだという。このエピソードを“ショウジの紹介による就職”として理解しようとした筆者に対し、カッチャンは「職安職安。俺全部職安通しとる」と強調した。

*: ショウジの紹介ではなく?

K: 紹介じゃないよ。職安通して行っとるけ。それでも一応。じゃないと金がもらえんかったけ職安から。色々これ(お金のジェスチャー)もらうためにはね、(頭を指して)ここ使わないけんのんで。

*: なるほどね(笑)。

K: その時にも、公共機関は活用せないけん。

(2009/01/23)

ここで語られているように、これまでのカッチャンの再就職はいずれも事前にインフォーマルな「つながり」から情報を得て職安を利用したものである。その際、カッチャンにとって職安とは単に「お金をもらうため」の機関であった。

彼は、建設会社での仕事を「コレ(腕)がモノいう世界」「キツかったけど、面白かった」というが、会社とのトラブルによってその建設会社を離れてしまった。入社1年後から「代理人」として現場を任せられるようになった彼は、会社(社長)の要求と、彼の指示のもとで作業する年配作業員との間で「板ばさみ」を経験した⁴⁾。そうした状況に我慢できなくなったカッチャンは、同僚とともに「ざけんなやあ!!」と社長にキレた。

このほか、給与支払いをめぐる不満などを理由にカッチャンは会社を辞めた。作業は楽しく人間関係も良かったが、それ以上に会社での自分の役割や責任が重すぎたという理由で2度目の離職を決断した。

彼は再び職安に通った。職安では、彼の兄やその友人が働いている大手自動車メーカーの関連工場の求人

票を探した。「『金(給料)がいい』つーのはもう前々から聞いてとった」からである。彼はなんとか目当ての工場に期間工として職を得た。

「完全に金だね。労働条件よりも金」を基準にし「別に『休日出ろ』言われても全然出」るつもりだった彼は、真面目に働いた。しかし、2008年末からの世界同時不況が彼の仕事を直撃した。「派遣切り」の対象となった彼は、2009年1月に解雇されてしまった。

その直後、彼は仕事を「焦って決めたところで、別に得なんかない。それは今までで重々分かったこと」「明日から働ける場所なんかそうそう見つかるわけもない」と語った。彼は職安に通うことで失業保険を受給し、しばらく保険暮らしをした。

失業から3カ月が経過する頃、カッチャンは高校時代の友人のヤマタクから、彼の働く工場に誘われた。そして、やはり彼は職安経由でその工場に就職した。

(2) ショウジ

高校卒業後、ショウジは学校経由ではなく知人による紹介を通じて小さな建設会社に就職した。「仕事はラクだったけどね…面白くなかった」という。彼はその会社に1年ほど勤めた後、人間関係を理由に辞めた。

それについて、彼は多くを語ろうとしなかった。インタビューを行った2009年当時、「今は俺もう、ちょっと大人になって、マジやっぱ会社でも工場になると、いっぱい人間がおるわけじゃん、(中略)俺、それに対応する能力がついてしまった」。しかし、19歳当時勤めていた職場では「ダメな人がおったら、もう、ダメ、ダメだった」ために「ブチ切れそうになっ」て初職を離れた。そのとき彼は次の仕事を考え準備していたわけではなかったために、離職後しばらくは無職の期間を過ごすこととなった。

無職の状態が続いていたある日、ショウジは高校時代の友人から「アマチュアバンド」が出演する「ライブ」に誘われた。ショウジはライブ会場で、友人に紹介されてある女性と知り合った。特に親しくなったわけではなく「別に、友達の友達ぐらい」というその女性の父親は、小さな建設会社の社長だった。ある時、その女性の父親が人を探しているという話が、友達を通して間接的にショウジの耳に入ってきた。「バイトでいいやと思っとった」彼は、その会社で働きはじめた。そしてしばらくすると、彼らの知らないうちに「いつの間にか、(中略)いいように正社員にされ」ていた。

高卒時と同様、ショウジはインフォーマルな「つながり」を通じて職を得、その会社で「長く続ける気なかった」がそのまま1年ほど働き続けた。ところが、

働いているうちに彼はあることに「気づいた」という。
S：先輩とか、続々辞めていって、若いもんがみんな、ほとんど辞めていっていったんよ。結局、ここにおいても意味がないみたい。なんか、その人とか例えば5、6年とかおっても、1円も給料上がらんとかって言って、(中略)「今後も上がる予定はない」みたいなこと、言われたみたいで、[*：うんうんうん。]でね、そんな、ずっと働いても10万そこそこしかもらえなかったら、ね。頑張る、意味がないしさ。もちろん、労働条件というか、(中略)残業しても手当てもつかんし、昼間も上がることもないし。
(2009/01/22)

現場の作業は「楽しかったけど」、過酷な労働をこなしても残業手当はおろか、昇給もないと会社側から断言された先輩社員をみていると、ショウジはこの会社に「頑張る、意味」を見出せず、「どうせ長く続ける気なかった」ということもあって会社を辞めた。そこでもショウジは、次の仕事のあてがないまま離職した。
2つ目の職を離れてから、ショウジは初めて職安に通った。そこで彼は大手化学繊維メーカーの関連工場での仕事を見つけて、3度目の就職を果たした。

(3) ヤマタク

高校卒業後、父親の紹介で建設会社に就職したヤマタクは、職務をめぐる職場での人間関係と、それに付随する賃金への不満から離職を決めた。「辞表」を出すという「知識がなかった」彼は、辞職の決意を社長に直接伝えに行った。「『この後どうするんだ?』って言われたけど、『まだ何も決めてないんです』って言ったら、『今仕事もない時代だけもうちょっとおってもいいんだぞ』って言ってくれたけど、『いやもうここで仕事する気にはなれません』」と答え、彼は会社を離れた。

ヤマタク (以下, Ya) : 急に仕事なくなって、何していいかわからなかったけど、とりあえずパチンコ行って(笑)、そこそこ勝ったりしてって、でも「これじゃあいけんな」と思って。冬に変わる時期だったけど、すごいタイヤ屋さんが忙しいじゃん。(中略)バイトで行きはじめて頃に、すぐ今の現場の話があって「1回話聞きに来たら」って言うてくれて。高校の先輩がそこに勤めてたんよ。その人が辞めるけど、代わりを求めるとみたいな感じで、話聞きに行つて。「もう今すぐにでも来てほしい」って言われて「無理です」と(笑)。「バイトが忙しい期間が終わるまでは無理なんで、それが終わってからでも良かった

らぜひお願いしたいです」って話して…
(2011/03/08)

結局ヤマタクは、「タイヤ屋」でアルバイトとして働いた後、高校の先輩など知人からの紹介でアスファルト合材の製造工場に勤めることになったのである。

(4) ヨシ

高校3年時、「とりあえず漠然と、地元で就職できたらいいな」と考えていたヨシは、卒業後、実家から通勤できる「パン工場」で働きだした。ところが「あんま面白くもなかったし」早朝出勤と「粉」による手荒れを理由に、その仕事を半年で辞めた。

その後1、2カ月「職安とか結構、見に、ちよろちよろ行っ」た。しかし「いいの(求人)が特にないし」、ある木材工場を受験したが不合格だったため、それ以降は職安に行かなくなったという。それから彼は、2カ月ほど「ニート時期」を過ごした。その後「実家のすぐ近くの、知り合いのオッチャン」に「バイトさして」と頼み込むことによって、非正規ながら就労の機会を得た。19歳になる少し前のことであつた。

「オッチャン」のところで働いていた約10カ月の間、ヨシの頭の中には正社員になろうという「考えはなかった。とりあえずそこで働いて、暮らせればいいかみたいな」。ところがある日、県外転出の機会に遭遇する。

ヨシ (以下, Yo) : (「オッチャン」の知り合いの) 息子かなんかが、大阪で働いてって、その人元々X県出身のやつだから、X県の若い子を探しとるっていう話が偶然にも、入ってきたらしくて、それをうちの父さんから聞いて、「『探しとるんだけど、どうか』って言われたけど、どうする?」みたいな。その時は、まだ「あー、そうなん」みたいな、感じてしか返してなかったけど、…結構、その当時やっぱ、県外に行つとる人のほうが多かったじゃん結構。大学行つたりとか。ほんと、なんとなくっチャーなんとなくなんだけど、まあ「行つてみるのもいいかな」と思って。

(2009/05/01)

この時のヨシの考えは、高校3年時の地元志向から変容を遂げていた。「まあ、『(県外へ)行つてみるのもいいかな』」と考えるようになったことを「大人になると食いもの好みが変わるとか(笑)、それと一緒に感じ」(2009/05/01)と軽く説明してみせたのである。結局彼は、「思い切ったこと」であるのも確か

だが、父親や知り合いを通じたつてによる就職をあてにして単身大阪へ「なんとなく」移り住んだ⁵⁾。

4. 「地元つながり」の介在

次に、調査協力者たちの経験から、彼らの離転職過程に内在する特徴を以下三点に整理してみよう。

(1) 会社や職場への不満と無計画で利那的な離職

調査協力者の離職をめぐる語りには、会社の体質や賃金体系、および職務に対する彼らの不満が渦巻いていた。カッチャンは虚偽報告に躍起になっていた会社に嫌気がさして、次のあてがないままに初職を辞めている。ショウジの存在によって就職が実現した建設会社では、自身の仕事の責任が重すぎたことと賃金支払いのことにキレて、辞めてしまった。

また、ショウジは職場の人間関係を理由に「ぶちギレそうになって」初職をやめた。その際、次の職へのあては「なかった」という。その後、高校時代の友人のつてで建設会社に職を得た。ところが、次々と辞めていく先輩を目にして労働条件の劣悪さに「頑張る、意味がない」ことに気づいた彼は、ほどなくこの会社を辞めた。

同じようにヤマタクも、人間関係と賃金の問題から「ここで仕事する気にはなりません」と社長に告げ初職を辞めた。そのときには次の仕事のことは「考えてなかった」。ヨシは、始業時刻が早いうえに「あんま面白くもなかったし」、「手荒れ」を理由に初職を半年で辞めた。親からは「辞めてどうするの」といわれたが、「手荒れ」に加えて幼い頃から病気がちだったことを持ち出すことで親を納得させ、なんとか辞めることができた。

彼らは、賃金や職務に対する不満によって自身の離職を正当化するとともに、その過程を利那的で無計画な、衝動的なストーリーとして構成する。注目すべきは、このストーリーが特定の語りのフレームによって補強されていたことである。

*：(初職を)辞めた時に、次の仕事決まっとったん？

K：決まってないよ。

*：もうここはダメやって、そのまま辞めて、その後、

[K：まあ若気の至りだわねえ。] おおん(笑)。

K：考えずに辞めるって。

*：ショウジも言いよったけど(笑)。

K：若気の至りだよ。あの当時だけできたことだって。

(2009/01/23)

ここで筆者がショウジに触れているように、こうし

た「若気の至り」フレームはショウジの語りのなかにも登場した(前節参照)。インタビュー当時20歳代前半だった調査協力者たちは、労働市場における自身の経験を「若気の至り」フレームで振り返り、そうすることで現在の状況を定義づけていたのである。このことの意義は本稿の最後に考察することとしよう。

(2) 「ブー」「ニート時期」という経験

「やっくれんわ」と初職を辞めたカッチャンは、その後「1カ月ぐらいブー(無職)」に陥った。2度目の離職後もやはり同じような状態に置かれた。工場で「派遣切り」に遭遇し、解雇されることが判明した2008年の暮れから2009年のはじめにかけて、彼は「焦って決めたところで、別に得なんかないけ、それは今までで重々分かった」「すぐ明日から働ける場所なんかそうそう見つかるわけもない」と語り、焦りや不安、深刻な様子を見せようとしなかった。しかし、ショウジが「いや、深刻だろ。あいつはそう言ってないけどな。実際(深刻だろう)」(2009/01/04)というように、一般的にみれば不安定な生活への「転落」である。

一方、そのように語るショウジでさえも初職離職後はやはりしばらく無職の期間を過ごすこととなった。次の仕事を探さずに辞めるという無計画な離職は、彼にも安定した収入を得られない生活を余儀なくした。ヤマタクやヨシも、次の職を見つめる前に離職してしばらく安定収入のない生活を送らざるをえなかったという点で、同じ経歴をたどっている。ヨシは一度職安に足を運んだが、就職試験に失敗するやいなや、まったく行かなくなってしまった。この頃をヨシ自身は「ニート時期」と表現し、「遊んどったね。昼と夜の生活が逆転」した期間は約2カ月に渡った。

多くのケースにおいて、調査協力者たちは次の仕事の予定をたてないまま離職を決意し、実際にそうしていた。この意味で、調査協力者たちの離職過程にはいつ「フリーター」や「無業者」に陥ってもおかしくないような要素がつきまとっていたといえてよい。正社員からの早期離職はしばしば「スムーズな移行からの離脱」(竹石 2006)とされるが、調査協力者たちもそれぞれ「ブー」(カッチャン)や「ニート時期」(ヨシ)を過ごした。ヤマタクのように「パチンコ」に精を出す者もいた。こうした経験が相互に共有されていたにもかかわらず、彼らは離職を繰り返した。

この背景で、離職経験が「地元つながり」のなかで流通し参照可能な資源となるため、離職への抵抗感が減じていたのかもしれない。しかし同時に、彼らは無職の状態を脱出することにその都度成功していた。しかも、先に確認したように彼らの再就職の語りにはほ

ほ常に「地元つながり」の語りが挿入されたのである。

(3) 正規労働市場に引き戻される若者たち

調査協力者の再就職過程に関する語りを整理すると、「地元」で形成された社会的ネットワークやコミュニティが頻繁に登場することに気づく(表2)。この「地元つながり」には家族や学校経験を通じて形成されるもの、あるいは趣味を媒介するものもある⁶⁾。いずれにせよ、調査協力者の再就職過程は「地元」で形成されたさまざまな「つながり」とともに記述される必要があることを理解しなければならない。

カッチャンの2度目以降の就職は、兄弟や中高時代に形成された「つながり」が重要であった。ある工場の待遇や仕事の様子についてあらためて「聞くまでも」なかったように、彼は「つながり」に流通するメンバーの経験を参照しながらその都度の職業選択を行っていた。4度目の就職は高校時代の友人であるヤマタクの存在で実現した。カッチャンとヤマタクは高校卒業後日常的に付き合ってきたわけではない。ショウジらが形成する改造自動車の仲間が広がる中で、彼と再会したのである。

初職を「ブチ切れそうになって辞めた」ショウジは、高校時代の仲間との再会によって事をうまく運んだ。初職と2つ目の職は、いずれも地元の「つながり」を通じて得られたものであった。しかし、建設会社を辞めた後、彼は職安に足を運んだ。彼にとっては初の職安であり、そこで見つけた工場の仕事を2012年7月現在も継続している。それまで家族や地元の「つながり」を通じて職を得てきたショウジだが、3度目の再就職活動はそのような「つながり」を離れ制度化された職業紹介機能を利用した。

調査協力者たちの経歴を整理すると、地元で形成された「つながり」のなかで彼らは再び職業世界へと引き戻されていたことが分かる。純粋な職安利用は主流ではない。この傾向は、今回の調査協力者以外の「地元つながり」メンバーにも確認されるものである。では、このような労働移動の過程を調査協力者たちはどのように経験したのだろうか。さらに、そうした経験は彼らの「地元」での「大人への移行」をどのような過程として意味づけるのか。これらを明らかにするた

めには、「地元つながり」と彼らの労働世界が結びつくその様式に迫る必要がある。

5. 「地元」表象を資源とする労働市場の解釈

若者たちの語りにアクセスするにつれ、筆者は、彼らは「地元つながり」を通じた就職を志向している(意識的に、好んでそうしている)と考えるようになった。彼らが職安よりも「地元つながり」のなかで就業機会を得ようとする理由を突きとめたいと思ったのである。

そこで筆者は「なぜ人づてに職を得るのか」とショウジに問うた。しかしながら彼は、筆者の質問や発言に対する違和感をストレートに表現した。

S：田舎だけんそういうの多いんでしょ。田舎だからそういうのがあるだけでしょ。逆にいえば多分、都会でも俺らみたいな、グループはおおと思うんよ。(中略) そういう人らとは多分ねえ、また進路の違い、進み方違うと思うよ。田舎だから、こそでしょ。ベストなんぼぐらいの田舎じゃん。(中略) 別に俺らが望んでね、人づたいに探しとるわけじゃないけ。そういう環境なだけだと思ふよ多分。

*：職安じゃ見つからんのんかな？

S：見つけれるけど、[*：ショウジの感覚はどう？人づたいのほうが、職があるというか、職安だとやりづらいところがあるわけ？] だけそういうのも(笑)。[*：そういうのは、] 要はそんなことも意識してないわけよ要は。(中略) 職安で紹介する職場が全然良くて、普通の知り合いの紹介するやつはこじんまりしてなんか、微妙とかだったら、そりゃ職安のほうに行くかもしれんけど、どっちも田舎の企業だけん、大して変わらんわけじゃん。

(2009/06/12)

ショウジは意識的に「つながり」を活用しようとしているわけではないが、職安に行っても魅力的な仕事が紹介されるわけではなく「田舎の企業」の求人しかないと言った。この言説は、小規模事業所による求人

表2. 調査協力者たちの各入職経路

	初職	2つ目の職	3つ目の職	4つ目の職
カッチャン	学校経由	ショウジが働く会社(職安経由)	兄や先輩が働く工場(職安経由)	ヤマタクが働く工場(職安経由)
ショウジ	知人の紹介	高校友人の紹介	職安利用	
ヤマタク	親の紹介	職安利用	知人の紹介	
ヨシ	学校経由	知人の紹介	親族の紹介(大阪)	元先輩の紹介(大阪)

表3. 事業所規模別の求人比率 (%)

	X 県	東京都 (参考)
29 人以下	65.3	46.0
30-99 人	20.5	25.4
100-299 人	10.5	15.7
300 人以上	3.8	12.8
合計	100.0	100.0

注) 2009年秋現在。一般求人とパート求人の合計。X 県労働局と東京労働局のホームページ掲載の実数から算出。

が相対的に多いという「地元」の労働市場情勢と符合する(表3)。表に示す数値が大卒者に対する求人を含んでいること、さらに調査地域の労働市場はX 県のなかでも小規模であることを勘案すれば、彼らにひらかれた就職機会は数値以上に「こじんまりしてなんか、微妙」な地元の中小零細企業に限られる。就業機会をめぐる彼の認識は、あながち大げさなものではない。

ショウジと同様、ヤマタクやヨシも職安に通ったが魅力的な求人はほとんどなかったと語った。こうした就業機会をめぐる職安での共通経験は、彼らにとって「地元」労働市場のリアリティを組織化する重要な資源のひとつであった。彼らは知り合いの紹介で職場を選んでいただけでも、職安の紹介で選んでいたわけでもない。入職経路は彼らにとって大きな問題ではないために「その時自分の、フィーリングで」(ショウジ 2009/06/12) としか説明できないのである。しかし、各々の離転職経験を「地元つながり」に流通するさまざまな情報と接合し資源化してゆくことで、彼らは「地元」労働市場のリアリティを組織化していた。筆者の「職安か人づてか」という問いは、このリアリティを達成するものではなかったのである。

加えて、こうしたリアリティの構築実践は「地元」労働市場における自身の経験を特定の様式で解釈するよう水路づける。ヤマタクは自己の経験を周囲の大人たちをめぐる言説とセットで語ることで、自らの経験を「地元」物語のなかに位置づけようとしていた。このとき、筆者の相づちと呼応するかたちで用いられた「話がよく回る」「狭い町」という「地元」表象は、その解釈実践に十分な正当性を与えたのである。

Ya: 俺も最初ハローワークだったよ。でもまあいいのがないなと思って。そしたら、まあ、話が来たよね。実際、俺らの歳なんかは、ないと思うけど、40、50(歳)とかになって、(会社を)辞めたとかになったら、その人たちって大概、資格とか持ったりするじゃん。そしたらもう、欲しいとこなんかは、もう「すぐ来てくれ」みたいな話にもなったりする。うん。腕もあるし。(中略)「この人辞めちゃっ

たらしいよ」とか、「じゃあウチ来てもらおうか」って。

*: 話がよく回るんだね。

Ya: 回るね。(中略)それほど狭い町だけ。

(2011/03/08)

ここで「俺ら」は依然として「地元」の大人になれていない状態として提示されている。重要なのは、こうした自己定義を可能にするフレーム、すなわち「地元」物語の存在である。これは一種の「モデル・ストーリー」(桜井 2002) である。「地元」という物語を構成するさまざまなイデオロムを参照し、自己の経験を再帰的に組織化する彼らの解釈実践は、「地元」労働市場との関係を取り結ぶ様式をめぐる「大人」としての自己アイデンティティを方向づけてゆく。

職安に行こうが知人を頼ろうが、「田舎の企業」の求人情報しかない。そういう「ベストなんぼぐらいの田舎」を生きる自分たちにひらかれたライフコースは、「都会」のそれとは異なっている。「話がよく回る」「狭い町」のなかで、自分たちはさまざまな就業機会にアクセスすることができるし、この労働市場を「資格」や「腕」で渡り歩いてゆくのが「40、50(歳)」の人たちである。彼らが語りのなかで示していたのは、こうした「地元」労働市場のリアリティと、それを資源とする「大人への移行」の物語に自分たちを位置づけようとする解釈実践であった。

「地元つながり」のなかで組織化された「地元」という物語は、彼らの〈労働-生活〉世界のモデル・ストーリーであった。このストーリーの基盤をなす「地元」労働市場のリアリティは、今日の「若者と仕事」をめぐるドミナント・ストーリーをいとも簡単に修正し、モデル・ストーリーを強化する。そして時に、彼ら独自に生きられる「地元」の物語を新たに生み出してゆくのである⁷⁾。

S: 「あそこ忙しいらしいけど、なんか話してみる？」とか。(知り合いからの) そういう話なんか、いっぱいあるわけよ。最近では知らんけど。

*: じゃあなんか、「就職難」とか言っとるけどさあ、そういうのでいったらけこうあるわけ？

S: 選ばなかったら何でもあるでしょ。選ばなかったら、就職先なんかいくらでもあるでしょ。

(2009/06/12)

6. 「地元」物語における若者たちの「航海」

本稿では、ある地方の郡部地域を舞台とする若者の離転職経験と「地元つながり」の関連が、彼らの「大人への移行」の過程と意味を規定する側面について検討してきた。高卒後数年間、離職を繰り返した調査協力者たちは、「地元つながり」のなかで労働市場へと引き戻されており、そこで「地元」労働市場のリアリティを組織化する重要な資源にアクセスしていた。その過程を通じて生きられた「地元」という物語は、地域労働市場における彼らの離転職経験を「大人への移行」過程として意味づけてゆくローカルな解釈フレームとなっていたのである。

たしかに、彼らの移行過程は先行研究が一般化してきた「若者と仕事」の不安定化という図式と無関係ではない。彼らの離職を「失敗」や「転落」のレトリック、あるいは「スムーズな移行からの離脱」（竹石 2006）というフレームで語り、就業を「幸運」に回収することも可能である。加えて、離職経験を「若気の至り」フレームで語ったように、若年労働をめぐるドミナント・ストーリーは調査協力者たち自身の解釈にも混在している。

しかしながら彼らの語りは、そうした過程を歩むことこそが「地元」労働市場を生き抜くことであり、「地元」における「大人への移行」過程であるという解釈枠組みを示している。これは自己正当化というよりむしろ、「地元」の「大人」アイデンティティをめぐる調査協力者たちの再帰的で戦略的な営みである。すなわち彼らは、「地元つながり」を流通するさまざまな情報を資源として「地元」というモデル・ストーリーを構築し、そのなかに自らの経験をプロットすることで自己の「大人」アイデンティティを過去・現在・未来の歴史のなかで紡ごうとしていた。

以上の記述＝解釈は、「個人化」が問題視されている現代でも、仲間ネットワークやコミュニティが若者の生活やアイデンティティに大きな影響を及ぼすとする国内外の実証研究の成果（Furlong ほか 訳書 2009、乾 2010など）と一部符合する。そのうえで本稿の重要な知見は、仕事を中心とした「大人への移行」過程のリアリティが、「地元」におけるローカルな職業経験と「地元つながり」との関連の様式によって規定される局面を明らかにした点である。「地元」をめぐる地域表象が若者たちの経験やアイデンティティを方向づけ、さらにそのアイデンティティは「地元」物語の再構成へと接続する。つまり、「大人への移行」のリアリティおよびその過程での自己アイデンティ

ティは、若者たちが経験し組織化する「地元」という物語と相互構成的に達成されていたのである。

この結論は、人文地理学における若者文化研究の視座が、若者の職業移行や社会化に関する研究にも有効であることを示唆している。加えて、日本の若者の職業移行やネットワーク形成といった「大人への移行」過程を扱ってきた先行研究が、それら諸過程をグローバルな経済再編による「変容」や「崩壊」、「転落」のレトリックで論じてきたことの課題を浮き彫りにした。というのも、若者たちの経験にグローバリズムからの一方的な影響を読み取ろうとしてきた先行研究は、かれらが用いるローカルな解釈フレームと、その歴史性や戦略性を背景化させてきたからである。このことは、若者たちが形成する「つながり」を若者個人の経験の外側で実体化し、キャリア形成に対する機能や脆弱性を論じる場合には問題にならなかった。しかし、若者たちの主観の世界から移行過程を把握しようとする場合、「大人」アイデンティティをめぐるかれらの実践と地域的な構造との交渉過程はきわめて重要なトピックだと思われるのである。

とはいえ、若者をめぐるいくつかの議論は本稿の問題関心に重要な道筋を与えている。たとえば不安定就労に携わる「ノンエリート青年」たちの「なんとかやってゆく世界」を観察する際のスタンスについて、中西（2009）は次のようにいう。「所与の現実のなかでよりよいポジションを得るための実際的行動には、たとえ微細な変化のように見えても、経験の蓄積と言うに値する『航海者』としての軌跡が看取できる」（p.32）。本稿の若者たちが「ノンエリート青年」であるかは検討の余地があるにせよ、「航海」というメタファーは、限定的な資源を自前のやり方で組織化してきた若者たちの経験を「大人への移行」の物語として可視化させる。この観点からすれば、本稿が強調したのは「航海」が進行している海域の特質や、気象や潮流から海域を定義づける「航海者」の解釈実践への視点である。必ずしも目視できない「大人」という目的地を限られた情報と手段で目指す「航海者」として若者たちを対象化し、その「航海」を読み解くとき、この視点は鋭い洞察をもたらすのではないだろうか。

【註】

(1) 乾 (2010) によれば、ネットワークとコミュニティの一定部分は重なりあっているものの、個人のアイデンティティの基盤はコミュニティであるという (pp.275-276)。しかし、仕事を中心とした「大人への移行」の過程と意味を扱う本稿では、両者を総称

- し「つながり」と表現する。なぜなら、職業キャリアの問題と労働市場における「大人」アイデンティティを論じるうえで、両者は明確に区別されないからである。ひるがえって本稿は、私生活上のアイデンティティの問題に言及しない。そうした側面を含め、若者の移行過程を多面的に描く作業を本稿の今後の課題としてあらかじめ断っておきたい。
- (2) 「地域」という空間的要素への注目は、後期近代の特質を、社会の諸構造と人びとの経験フレームとの乖離に求めた Furlong ほか (訳書 2009) の関心とどのように関連するのか、非常に興味深い。
- (3) 人文地理学における「空間」には、「地域」のほか学校や自宅など多様なスケールの「場所」が内包されるが、本稿では調査協力者たちが無意識に語る「地元」を、職場や仲間集団などで経験された生活圏として扱う。これにより、構造化され制度化された地域を物語として把握し、若者たちの主観的世界との交渉過程を記述することが可能になる。
- (4) 彼らの勤める会社が工事を受注した場合、現場作業は下請け孫請け会社の「オッサン」社員や日雇いの派遣作業員らとともに進められた。彼らは経験や技術の面において「ハタチそこのガキ」である調査協力者たちより秀でており、「言葉遣いひとつで食ってかかる」という (カッチャン2009/01/23)。
- (5) ヨシは大阪転出後も会社の先輩の紹介で転職を経験した。この過程も「つながり」の観点から論じることができるが、本稿の関心は「地元」での移行過程にあるため、大阪でのヨシの経験は別稿に譲る。
- (6) 近年の若者論においては、「公共性」を備えたネットワークやコミュニティの形成契機として「趣味縁」が積極的に扱われつつある (浅野 2012)。
- (7) このインタビューが実施された段階で、ショウジが工場に勤めはじめてから数年が経過していた。このとき彼には転職の意向はなく、知り合いからの求人情報に触れる機会もほとんどなかったために「最近では知らんけど」と付言した。

【参考文献】

- 浅野智彦, 2012, 「趣味縁から公共性へ」小谷敏・土井隆義・芳賀学・浅野智彦編『若者の現在 文化』日本図書センター, pp.245-274。
- 新谷周平, 2007, 「ストリートダンスと地元つながり—若者はなぜストリートにいるのか—」本田由紀編『若者の労働と生活世界—彼らはどんな現実を生きているか—』大月書店, pp.221-252。
- Furlong, A. & F. Cartmel, 2007, *Young People and Social Change*, 2nd ed., Open University Press (=2009, 乾彰夫ほか訳『若者と社会変容—リスク社会を生きる—』大月書店)。
- 堀有喜衣, 2004, 「無業の若者のソーシャル・ネットワークの実態と支援の課題」『日本労働研究雑誌』46(12), pp.38-48。
- 乾彰夫, 2010, 『〈学校から仕事へ〉の変容と若者たち—個人化・アイデンティティ・コミュニティ—』青木書店。
- 中西新太郎, 2009, 「漂流者から航海者へ—ノンエリート青年の〈労働—生活〉経験を読み直す—」中西新太郎・高山智樹編, 『ノンエリート青年の社会空間—働くこと, 生きること, 「大人になる」ということ—』大月書店, pp.1-45。
- Nayak, A., 2003, *Race, Place and Globalization*, BERG Publisher Ltd.
- 沖田敏恵, 2004, 「ソーシャル・ネットワークと移行」労働政策研究・研修機構『移行の危機にある若者の実像—無業・フリーターの若者へのインタビュー調査 (中間報告) —』労働政策研究報告書 No.6, pp.186-211。
- 桜井厚, 2002, 『インタビューの社会学—ライフストーリーの聞き方—』せりか書房。
- Sassen, S., 2001, *Global City: New York, London, Tokyo*, 2nd ed., Princeton University Press (=2008, 伊豫谷登士翁ほか訳『グローバル・シティー—ニューヨーク・ロンドン・東京から世界を読む—』筑摩書房)。
- 竹石聖子, 2006, 「『地元』で生きる若者たち」乾彰夫編『18歳の今を生きぬく—高卒1年目の選択—』青木書店, pp.227-254。
- 戸室健作, 2009, 「請負労働の実態と請負労働者像—孤立化と地域ネットワーク—」中西新太郎・高山智樹編, 『ノンエリート青年の社会空間—働くこと, 生きること, 「大人になる」ということ—』大月書店, pp.227-268。
- 内田龍史, 2007, 「フリーター選択と社会的ネットワーク—高校3年生に対する進路意識調査から—」『理論と方法』22 (2), pp.139-153。

【付 記】

本稿は日本学術振興会科学研究費補助金 (特別研究員奨励費 課題番号24・7183) による研究成果の一部である。